PB-164

北見赤十字病院での栄養食事指導の取り組み

北見赤十字病院　栄養課
○村田（むらた）　智津子（ちづこ）、会田　京子、松本　奈津子、神宮　かおり、
井田　亜希子

【はじめに】当院では以前より栄養食事指導に力を入れており、外来では内科に専属の管理栄養士を配置し、診察の待ち時間を利用した継続的な介入をおこなっている。その他外科や消化器内科、他病院との連携による栄養食事指導もおこなっているが、今回は入院での栄養食事指導を検討、介入した結果、患者の栄養教育や指導件数の増加につながったので報告する。
【取り組みの内容と結果】平成23年8月より管理栄養士を病棟担当制とし、入院時にベッドサイド訪問による介入を開始した。ベッドサイドでは入院時に病院食の説明を、退院が決まってからは自宅での食事について個人にあわせた内容でおこなうこととした。その取り組みにより、患者からは「病院食を参考とし、食事内容を理解することで自宅へ帰ってからの不安が少なくなった。」「管理栄養士が病棟へ顔を出すことで食事の疑問や食思不振時の相談がしやすくなった。」等多くの意見が聞かれた。又、栄養食事指導件数も、1ヶ月で入院300～350件となり、外来とあわせると500件以上となった。
【考察】この取り組みにより、患者への栄養教育だけではなく、栄養食事指導の件数増加(収益増加)につながった。又管理栄養士が病棟へ行くことにより、病棟スタッフとの連携が強くなり、個人にあわせた細やかな対応もできるようになった。今後は予防も含めて、在宅での適正な栄養管理ができるよう、介入していない外来での栄養食事指導の強化を検討していきたい。

PB-165

やる気にさせる栄養指導を目指した実践的な取り組み

静岡赤十字病院　栄養課
○梅木（うめき）　幹子（みきこ）

はじめに当院の栄養指導は医療社会事業部所属の管理栄養士２名が専属で対応していたがH 25年度より栄養課と統合したことで栄養課の管理栄養士も栄養指導に積極的に対応することになった。以前より栄養課では糖尿病教室食事会、外来化学療法患者の栄養相談、ベッドサイド指導は実施していたが統合後は全ての栄養指導において、どの管理栄養士が指導してもぶれない、標準的で患者をやる気にさせる指導を目標に、より実践的なツールとコミュニケーションスキルを用いた栄養指導に取り組んでいるので報告する。方法患者をやる気にさせ、行動変容させるためには患者が自身の現状を評価する事が重要である。約８割を占める糖尿病、高血圧の指導の際、まずは日頃の食生活の栄養摂取量を知ってもらうため、既存のフードモデルに加え多くの方が利用しているコンビニ弁当のフードモデルを手作りし、カロリー、炭水化物、塩分量を把握できるようにした。また院内の自動販売機には飲料の栄養成分を表示して身近な食品で自身の食事を評価できるようにした。塩分制限の患者には検査から得られる尿Ｎａ、尿ＣＲＥから推定塩分摂取量を計算して食事との関係を数値で示すようにし加工食品や調味料等に含まれている塩分量と比較させ意識付けるようにした。そして肥満患者には簡便な体脂肪計を用いて数値で体脂肪の悪影響を説明し行動変容につなげるよう実践的な指導を展開している。結果及び考察糖尿病、高血圧などの生活習慣病はその習慣を行動変容させ、継続させることは容易ではない。何らの形で患者の現状を評価し患者に認識させることが重要である。評価する、分かる、気づく、変わる、のＰＤＣＡサイクルを常に回し続けるために新しいツールを用いたインパクトのある指導は患者ばかりでなく管理栄養士もやる気にさせるために有効であると考えられた。

PB-166

創傷治癒のための栄養状態改善と便性コントロール～管理栄養士の立場から～

秦野赤十字病院　医療技術部　栄養課
○渡辺（わたなべ）　和歌子（わかこ）

【背景】８０代女性。大腸癌による直腸膣瘻に対しストーマ造設術を施行、手術創感染により創離開。
【目的】Ａｌｂ１．６０と低栄養、離開創からストーマまでの距離が１ｃｍと近接しており、創の排泄物汚染予防のため便性コントロールは必須、栄養状態改善、便性コントロールを目的とし消化態栄養剤を使用し改善を認めた症例を報告する。
【倫理的配慮】個人情報管理の順守について紙面を用いて説明し承諾を得た。
【方法】ハリスベネディクトの式よりＢＥＥ１２００Ｋｃａｌ、ストレス係数１．５、活動係数１．０、ＴＥＥ１８００Ｋｃａｌとした。少量で高エネルギーを確保、排泄物量を増加させたくないこと、皮膚乾燥あり成分栄養剤では脂肪が不足し長期投与には不向きと考え、消化態栄養剤に変更。
【経過】成分栄養剤投与時の便性はブリストルスケール７であった。消化態栄養剤に変更することで成分栄養剤よりも便形成されるため便性を観察。変更後８日目で　スケール５となった。Ａｌｂも１９日目２．３４と改善、創の状態も褥瘡対策チームとの連携により陰圧閉鎖療法を開始、改善につながった。２２日目スケール２の便により、ストーマの面板が押し上げられることによる漏れが発生。尿路感染による熱発あり、水分不足が考えられ、水分を増量。水先投与により、胃内容量の調整を図った。２８日目スケール４と便性改善見られ、２６日目Ａｌｂ２．７６と栄養状態改善、創の状態も改善した。
【結果】離開創とストーマの位置が近接、栄養状態改善と同時に便性コントロールも必要であったが、消化態栄養剤は蛋白質が乳清ペプチドまで分解され消化吸収がよく、栄養状態改善に効果があり、また下痢を予防し、便性コントロールを図れたこと、また、脂肪を含むためバランスがよく長期投与にも適していたと考える。

PB-167

糖尿病の療養における患者会の役割と今後の課題

旭川赤十字病院　医療技術部　栄養課[1)]、糖尿病内分泌内科[2)]
○佐々木（ささき）　智子（ともこ）[1,2)]、長瀬　まり[1)]、中嶋　美緒[1)]、
前川　奈都子[1)]、神田　暢子[1)]、森川　秋月[2)]

糖尿病患者が長期にわたり療養及びセルフケアを続けていく上で、患者会の存在は重要と思われる。当院の糖尿病患者会である大雪会は今年で創立46年を迎える。今回、大雪会の変遷、活動状況、患者会が果たす役割さらに今後の課題について報告する。患者会の変遷としては当初は数人の患者による糖尿病友の会として発足し、糖尿病専門外来ができて会員数が増加したが、その後、急性期病院としての役割を担うために地域連携病院に転院する患者も多く、会員数は減少した。その中でも年間行事としては運動療法の歩こう会、パークゴルフ、血糖測定などをしながらの一泊研修旅行、糖尿病週間に先駆けた市民講演会、食事療法のバイキング食事会、機関誌の発行など医師をはじめとして病院スタッフ（CDEJ）の協力のもとで実行している。患者会の役割は患者同士でセルフケアの情報を得る場であったり、行事に参加することで仲間意識が生まれて治療中断を防げること、運動療法などで新しい試みができること、さかえや大雪などの機関誌からの糖尿病に関する専門的知識を得ることができることなどがあげられる。さらに会の運営を良好に保つため、患者会は病院スタッフとの情報共有が必要である。問題点としては会員の高齢化、重症な合併症の発症、患者自身のライフスタイルの多様化に伴い、行事参加数の減少があげられる。今後の課題としては連携パスなどを利用した患者会のグローバル化を行い、地域連携病院に転院する患者に対して当院の患者会に参加できるシステムの構築が必要である。高齢化する重症合併症予防するためにも、地域連携病院としての役割を担い、ホットステーションになるように広域的な患者サポート体制の提案が必要と思われる。